

いわさきちひろの歩み 1918–1974



ちひろの歩み

世界の歩み

1918年 0歳	1918年12月15日、福井県の武生で生まれる。
1925年 6歳	東京・渋谷の長谷戸小学校に入学。治安維持法制定。(1925年)
1931年 12歳	東京府立第六高等女学校に入学。満州事変(侵略戦争の開始)(1931年)
1933年 14歳	岡田三郎助に師事、デッサン・油彩の勉強を始める。
1936年 17歳	朱葉会女子洋画展に入選。
1937年 18歳	小田周洋について藤原行成流の書を習い始める。婿養子を迎える。夫の勤務地である満州の大連に渡るが、翌年、夫の自殺により帰国。
1939年 20歳	中谷泰に師事、再び油絵を描き始める。春、勃利女子義勇隊一行と共に再び満州へ渡る。夏、戦況悪化のため帰国。
1942年 23歳	5月、空襲で家を焼かれ、長野県松本市の母の実家に疎開。8月15日に終戦を迎える。
1944年 25歳	単身東京に戻り、「人民新聞」の記者となる。赤松俊子(後の丸木俊)に師事。
1945年 26歳	5月、空襲で家を焼かれ、長野県松本市の母の実家に疎開。8月15日に終戦を迎える。
1946年 27歳	朝鮮戦争勃発。(1950年)
1949年 30歳	紙芝居「お母さんの話」を書き、翌年文部大臣賞受賞。
1950年 31歳	松本善明と結婚。翌年長男・猛が誕生。
1952年 33歳	東京・練馬区下石神井に家を建てる。(現、ちひろ美術館・東京所在地)
1956年 37歳	小学館児童文化賞受賞。初めての絵本『ひとりでできるよ』を描く。
1967年 48歳	絵本『わたしがちいさかったとき』を描く。
1968年 49歳	最初の自作絵本『あめのひのおるすばん』を描く。
1971年 52歳	絵本『ことりのくるひ』を描き、73年ボローニア国際児童図書展にて、グラフィック賞受賞。
1972年 53歳	絵本『母さんはおるす』を描く。
1973年 54歳	絵本『戦火のなかの子どもたち』を描く。
1974年 55歳	原発性肝ガンのため死去。

ちひろ美術館コレクション

—世界の絵本画家が語りかけるもの—

ちひろ美術館では、世界中の絵本画家の作品を展示しています。アジア、アメリカ大陸、アフリカ、ヨーロッパ……と国や地域、文化や宗教は異なっても、画家たちは皆、それぞれの国を愛し、平和と未来の象徴である子どもを大切に思っています。個性豊かな作品からは、世界中のどの国にも、すばらしい文化と自然、人々の営みがあることが伝わってきます。そして画家たちは皆、未来への希望を絵筆に込めて、子どもたちに託しているのです。

子どもの頃、よく両親がいろんなお話を読んでくれましたが、私の大のお気に入りは世界中の民話を聞くことでした。その後、芸術家としてさまざまな文化の神話や民話の物語を書いたり、挿し絵を描くようになるなかで、私はあることを学びました。そして、そのことを君たちにも学んでほしいのです。すべての人間は平和と幸せという同じ夢を分かち合っているということを……。

(ジェラルド・マクダーモット／アメリカ)



ジェラルド・マクダーモット
『太陽へとぶ矢』より 1974年

セイフ・エディーン・ロウタ
『ゲーム』より 1984年

21世紀、はるかな地平から平和と友愛と共生の時が訪れるのを待ち望んでいます。人類の発展と、子どもの無垢な瞳と、その将来のために。この崇高な目標を達成するためのひとつの手段が「絵本」です。絵と文が醸し出す独特的のハーモニーが、人の知恵や文明への熱望を映し出せば、戦争や破壊という言葉は押し黙り、平和と友愛の文化が勝るでしょう。子どもたちは多くを吸収し、眞の意味での未来の担い手となるのです。

(セイフ・エディーン・ロウタ／スーダン)

画家のメッセージは、2000年に出版の『ちひろと世界の絵本画家たち ちひろ美術館コレクション』(講談社)のために、美術館へ寄せられたものです。

ちひろ美術館・東京

〒177-0042 東京都練馬区下石神井4-7-2 http://www.chihiro.jp/
TEL.03-3995-0612 テレホンガイド 03-3995-0820 FAX 03-3995-0680

安曇野ちひろ美術館

〒399-8501 長野県北安曇郡松川村西原 http://www.chihiro.jp/
TEL.0261-62-0772 テレホンガイド 0261-62-0777 FAX 0261-62-0774

ちひろ美術館 鑑賞ガイド

ちひろ 平和への願い

—世界中のこども みんなに 平和としあわせを—



CHIHIRO ART MUSEUM

いわさき ちひろ・平和への願い

「青春時代のあの若々しい希望を何もかもうち碎いてしまう戦争体験があったことが、私の生き方を大きく方向づけているんだと思います。平和で、豊かで、美しく、可愛いものがほんとうに好きで、そういうものをこわしていこうとする力に限りない憤りを感じます。」

いわさき ちひろ 1972年

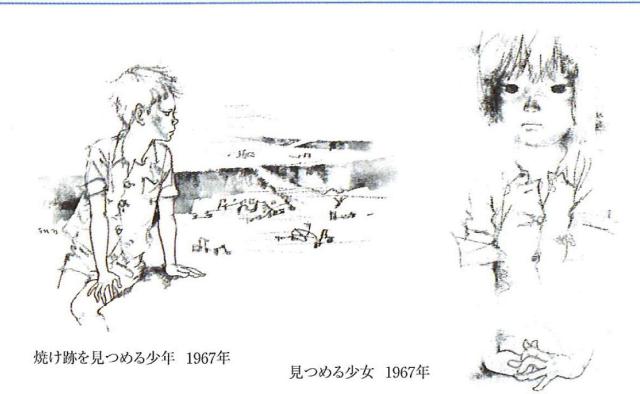
第二次世界大戦のなか、娘時代を過ごしたちひろは、罪のない子どもたちの夢や希望、生命をも奪う、戦争の悲惨な現実を目の当たりにしました。戦後、絵本画家となり、また一人の子どもを持つ母親となつたちひろは、深い愛情を持って、子どもたちの姿を描きつけました。

あどけないあかちゃん、いきいきとかけまわる子ども、そして戦火のなかに生きる子どもたち……。

ちひろが絵のなかの子どもたち、ひとりひとりに託したもの、それは「世界中のこども みんなに 平和としあわせを」という、願いでした。



赤い花を持つ少女 1969年



絵本『わたしがちいさかつたときに』

童心社 長田 新 編『原爆の子』他より

いわさき ちひろ 絵 1967年

1945年8月6日に広島、9日には長崎に、原子爆弾が投下されました。投下から数年以内で、34万人以上が亡くなり、今もなお、放射線被害により多くの人々が苦しんでいます。

この絵本は、広島で被爆した子どもたちが綴った詩や作文に、ちひろが絵を描いたものです。「戦争の悲惨さ」というのは子どもたちの手記を読めば十分すぎるほどわかります。私の役割は、どんなに可愛い子どもたちがその場におかれていたかを伝えることです。」とちひろは語っていました。

絵本『母さんはおるす』

新日本出版社 グエン・ティ 作 高野 功 訳

いわさき ちひろ 絵 1972年

原作はベトナム人の作家、グエン・ティ。ベトナム戦争のなか、祖国を守るために日々戦場に出かけていく母親と、その帰りを待つ5人の姉弟の生活を描いた物語です。

「戦場のなかの子どもでも、ベトナムの写真などをみると、子どものかわいらしさはたとえようもない」と語ったちひろは、「子どもは未来」という思いを込めて、深刻化する戦況のなかで明日を信じ、無邪気に懸命に生きる子どもたちの姿を、かわいく生き生きと描きだしました。



三人姉妹 1972年



娘のなかの母と子 1973年

絵本『戦火のなかの子どもたち』

岩崎書店 いわさき ちひろ 文・絵 1973年

1965年、アメリカ軍の北ベトナム爆撃開始により、激しさを増したベトナム戦争では、無差別攻撃により、多くの人々が犠牲になりました。

沖縄にある米軍基地から、ベトナムの子どもの頭上に、日々爆撃機が飛び立ってゆく現実に心を痛めたちひろは、ベトナムの子どもたちに思いをはせ、自らが体験した第二次世界大戦と重ね合わせながら、この絵本を描きました。この時期すでに、体調を崩していたちひろは、絵本の完成から一年後の1974年8月8日、ベトナム戦争の終結を知ることなく他界しました。

絵本の最後にちひろはこう記しています。「戦場にいかなくても戦火のなかでこどもたちがどうしているのか、どうなってしまうのかよくわかるのです。こどもは、そのあどけない瞳やくちびるやその心までが、世界じゅうみんなおんなじだからなんです。」

赤いシクラメンの花は
きよねんもおとしも そのまえのとしも
冬のわたしのしごとばの紅一点

ひとつひとつ

いつとはなしにひらいては
しごとちゅうのわたしとひとみをかわす。
きよねんもおとしも そのまえのとしも
ベトナムの子どもの頭のうえに
ばくだんはかぎりなくふつた。

赤いシクラメンの
そのすきとおった花びらのなかから
しんでいたその子たちの
ひとみがささやく。

あたしたちの一生は
ずっと せんそうのなかだけだった。



シクラメンの花のなかの
子どもたち 1973年

『戦火のなかの子どもたち』本文より 文・いわさき ちひろ